

[研究ノート]

## マカオのポルトガル語系話者（マカエンセ）のエスニシティ研究に関する調査報告

### Report on the recent research of the ethnicity of “Macaenses”- Macanese people of Portuguese descent

内藤 理佳  
Rika Naito

上智大学・慶應義塾大学・亜細亜大学 非常勤講師  
Sophia University, Keio University, Asia University (Part-time Professor)

**要旨:** 「マカエンセ」(ポルトガル語) とは、ポルトガルが 16 世紀半ばから実質的な植民地支配を行ったマカオで誕生したポルトガル人子孫とその後裔を指す。広東語話者の中国人(漢人)が人口の 9 割を占めるマカオの中で、ポルトガル語話者であり、ポルトガルとの文化的・精神的紐帯のもとに結束していたマカエンセはエスニック・マイノリティとしてコミュニティを存続させてきた。しかし、1999 年の中国返還後、マカオの急激な中国化とともに、マカエンセのエスニシティは大きく変容し、コミュニティは存続の危機を迎えている。本稿では第一に、中国返還後のマカエンセの現状を分析する。第二に、かつてコミュニティ内で話されており、現在消滅危機言語となっているポルトガル語系クレオール語の継承活動について報告する。第三に、2006 年から行っている筆者の研究上の成果を、本科研期間以前ならびに以後に分けて報告し、今後の研究展望を探る。

**Abstract:** “Macaenses”( in Portuguese) are the Portuguese descendants born in Macau, where Portugal had colonial rule since the mid-16th century until 1999. In Macau, where Cantonese-speaking Han Chinese account for 90% of the population, “Macaenses”, who are Portuguese-speaking and united under cultural and spiritual ties with Portugal, have kept their community as an ethnic minority. However, after the transfer of sovereignty of Macau to China in 1999, with the rapid Sinicization of Macau, the ethnicity of “Macaenses” has changed drastically, and their community is in danger of survival. In this article, I first analyze the current situation of the community of “Macaenses”. Second, I will report on the succession of Portuguese Creole language in Macau (called Patuá or Maquista), which had been spoken within the community and now is considered as an endangered language. Third, I will report the results of my research since 2006, before and after the period of this KAKEN, and will explore future research prospects.

**キーワード:** マカオ、マカエンセ、エスニシティ、ポルトガル語系クレオール語 (パトゥア語またはマキスタ)

**Keywords:** Macau, “Macaenses”, ethnicity, Portuguese Creole language in Macau (Patuá or Maquista)

#### 1. はじめに

マカエンセ(澳門土生葡人)とは、16 世紀半ば、ポルトガルがゴア・マラッカに次いでマカオを東アジア貿易の根拠地と定めて以降、約 450 年間にわたって事実上の植民地支配を行ったポルトガル人と、マカオならびに近隣諸国出身者との間に生まれた「マカオ生まれのポルトガル人子孫」とその後裔を指す名称である<sup>1</sup>。

人口の 9 割以上を中国人(漢人)が占めるマカオ社会の中で、マカエンセは常にエスニック・マイノ

<sup>1</sup> 「マカエンセ」(macanese, 複数形はマカエンセス macaenses)はポルトガル語、「澳門土生葡人」はマカオで話されている広東語の名称である。なお、日本のテレビ番組等で使用されている英語のマカニーズ(Macanese)はマカエンセのみならず、文脈によってはマカオ生まれの中国人を含む「マカオ人、マカオ住民」を指す場合があるため、本稿では使用しない。

リティでありながら、支配階級である少数のポルトガル人との婚姻や仕事上の忠誠を通じて準支配階級としての立場を維持するとともに、「東洋のポルトガル人」として、ポルトガルとの強い文化的・精神的な紐帯を基盤としたエスニシティ<sup>2</sup>のもとにコミュニティを存続させてきた。しかし 20 世紀以降、中国とポルトガルで起こったさまざまな社会変動と、1999 年 12 月のマカオ中国返還の影響によって多数のマカエンセがディアスポラとして海外移民の道を選び、現在、世界規模ではマカオ在住者よりも海外在住者のほうがコミュニティの多数派を占めている<sup>3</sup>。

筆者は 1996 年から約 10 年間、ポルトガル外務省の外郭団体カモンイス・インスティトゥート(Instituto Camões)の日本支部であったポルトガル文化センター（ポルトガル大使館文化部）に職員として勤務した。当時、東アジアの文化センターは在マカオの東洋ポルトガル院( Instituto Português do Oriente) が統括しており、マカオ関連の業務やマカオからの訪日団の受け入れに携わる中で、明らかに東洋系の風貌を持ちながら、ポルトガル人としての強いエスニック・アイデンティティを持つマカエンセたちに出会った。それをきっかけに 2006 年から中国返還後のマカエンセのエスニシティの変容に関する研究を開始し、2008 年 3 月、初めてマカオで約 2 週間のフィールドワーク（聞き取り調査）を実施した。その際、わずか返還 8 年後のマカオ社会において中国化が急速に進むとともにポルトガルの「痕跡」が消失しつつあることを痛感した。マカエンセ・コミュニティにおいて、それが如実に表されていたのが若い世代の教育言語の変化であった。返還前、マカオ生まれのポルトガル人子孫であること以外に、マカエンセの必要条件のひとつとして考えられていたのが「ポルトガル語で教育を受け、ポルトガル語を話す（多くの場合母語とする）」ことであった。ところが、香港とならぶ中国特別行政区のひとつとして生まれ変わり、ラスベガスをしのご勢いで成長し続けるギャンブル産業やユネスコ世界遺産の街並をセールスポイントとした世界的な観光地となったマカオにおいて、中国語が第一言語<sup>4</sup>、次いで英語が重要視されるようになり、親の世代がポルトガル語教育を受け、ポルトガル語を母語としていても、子女の教育言語を英語または中国語に転換するマカエンセの家庭が急増していた。若い世代の教育言語がポルトガル語でなくなることにより、ポルトガルとの精神的なつながりやポルトガル文化への興味関心が薄れ、かつてマカエンセ・コミュニティが中心となっていたカトリック祭事に参加するマカエンセの若い世代も少なくなり、コミュニティはかつての集結力を失って、2008 年当時、聞き取り調査を行ったマカエンセたちの多数がコミュニティの将来を悲観視していた。筆者自身も、マカエンセ・コミュニティの「中国人化」が加速していく中、彼らがポルトガルの価値観やポルトガルとの紐帯を守り続けることは非常に困難であり、現体制の継続（一国二制度）が約束されている 50 年間で終了する 2049 年以前に、マカエンセ・コミュニティとそのエスニシティは事実上消えていく可能性が大きいのではないかと考察した<sup>5</sup>。

<sup>2</sup> 「ポルトガルとの強い文化的・精神的な絆が自らのエスニック・アイデンティティの中核にある」という独特の精神性を、マカエンセはしばしば「ポルトガル性」「ポルトガルのもの」を意味するポルトガル語の造語「ポルトガリダーデ」(portugalidade)で表現する。

<sup>3</sup> 「マカエンセ」というエスニシティは統計上には現れない。世界に散在するマカエンセの総数に関する統計は存在せず、研究者によって 2 万人～15 万人と大きな幅がある。最新のマカオの人口統計は 2016 年に実施され、エスニシティ人口別で「ポルトガル系」と申告した住民は総人口 650,834 人の 1.8%にあたる 11,715 人であったが、その中には近年増加傾向にある、経済が低迷するポルトガルからマカオに出稼ぎに来たポルトガル人が含まれている。筆者はマカオ以外にカナダ、アメリカ、ブラジル、オーストラリア、香港、ポルトガル、イギリスに設置されているマカエンセ協会の会員総数が 4 千人強であることから推計して 4~5 万人（マカオに 1 万人弱、マカオ域外に 2~3 万人）と考えている。

<sup>4</sup> 中国返還以前、マカオの公用語はポルトガル語のみであったが、返還後は中国語・ポルトガル語の二か国語が公用語となった。

<sup>5</sup> 内藤理佳.2009.「中国返還後のマカエンセ (Macaenses) のアイデンティティの変容—マカオ在住のマカエンセ 16 名の聞き取り調査から—」放送大学大学院修士論文。

## 2. マカオのポルトガル語系クレオール語の継承活動

大航海時代と呼ばれたヨーロッパ人による海外進出の時代、ポルトガル人は「新発見」した世界の諸地域において、ポルトガル語を現地における国際共通語（リングア・フランカ）とした。16世紀半ばから極東貿易の拠点としてポルトガル人が定住し、事実上の植民地支配を行ったマカオにおいても同様であった。当時、マカオには現地の中国人のほか、インド・マレーシアなどのアジア諸国やアフリカ出身のさまざまなエスニック集団の人々が混在していた。ポルトガル人および母語が異なるエスニック集団との間のコミュニケーションツールとしてポルトガル語文法が単純化されたピジン言語が生まれ、広東語・マレー語・英語・コンカニ語・タミル語・サンスクリット語・ペルシャ語・アラビア語・ヒンドゥー語・オランダ語・スペイン語・フランス語・ドラヴィダ語・日本語<sup>6</sup>など、多様な言語の語彙と文法体系を持つクレオール語となり、マカエンセ・コミュニティの話し言葉として受け継がれてきた。同言語を指す最も古い名称であるパトゥア（*Patuá, Patoá*）の語源はフランス語で「農村のことば」を表す *Patois* とされているが、その理由は定かではない。コミュニティ内ではマカエンセそのものを指す言葉でもある「マキスタ」（*Maquista, Macaista*）が一般的に使用されている。また、パトゥア語で「マカオで話されているキリスト教徒の言葉」を指すパトゥア語「パピア・クリスタン・ディ・マカウ」*Papiâ Cristám di Macau* や「話し言葉」を意味する「パピアサン」*Papiaçám* などの名称もある。

1887年、中国（清）とポルトガルの間には結ばれた葡清友好通商条約によってマカオにおけるポルトガルの治外法権が公認されて以降、ポルトガルから教師（多くはキリスト教の神父）が派遣され「正統な」ポルトガル語教育が一般化されるとともに、パトゥア語は「間違ったポルトガル語」とみなされて次第に話されなくなった。現在、パトゥア語はマカオもしくは海外在住の高齢のマカエンセの一部によって話されている、もしくは記憶されているに過ぎず、ユネスコ指定の消滅危機言語のひとつとなっている。

コミュニティ存続の危機的状況のもと、中国返還の数年前から、パトゥア語を豊かなマカオ文化の一要素として再認識させようとする継承運動が在マカオのマカエンセ関連団体を中心に行われてきた。その代表的な人物が「アデー」の愛称で知られたパトゥア語詩人、ジョゼ・ドス・サントス・フェレイラ（1919-1993）である。アデーは多くの詩・演劇・オペレッタなどさまざまな作品を執筆し、ラジオやテレビ番組を通してパトゥア語の朗読を行った。1993年、パトゥア語によるアマチュア劇団が設立され、アデーも発起人の一人であったが、病気により初回公演を待たずに死去し、劇団の将来は当時、マカエンセ・コミュニティの重鎮のひとりであった小説家で弁護士のエンリケ・デ・セナ・フェルナンデス（1923-2010）の長男ミゲル・デ・セナ・フェルナンデス（1961~）に託された。父と同様ポルトガルで法学を修めマカオで弁護士として活動しているミゲルは、現在マカエンセ・コミュニティのリーダー格のひとりとして、マカエンセ協会（*Associação dos Macaenses*）会長をはじめさまざまな関連団体の要職を兼任し、パトゥア語劇団主宰として作品制作から演出まで全てをこなし、毎年5月にマカオで開催される国際文化フェスティバルに参加してパトゥア語演劇公演を定期的に行っている。

また、パトゥア語はマカエンセの伝統家庭料理の名称にも多用されている。マカエンセ料理<sup>7</sup>は、ポルトガル料理をベースにして、アフリカ、インド、マレー（インドシナ）、そしてマカオ地元の広東料理の原材料やスパイス、料理法を混合させたいわゆる「究極のフュージョン料理」である。かつて、各家庭に伝わる秘伝のレシピとして門外不出の料理であったが、20世紀後半に商業化されてマカエンセ料理を提供するレストラン<sup>8</sup>が軒を並べるようになった。マカエンセ関連団体のひとつであるマカエンセ・ガス

<sup>6</sup> パトゥア語の語彙の中には、17世紀、鎖国後の日本からマカオに逃れ、一時的に滞在していた日本人キリシタンが使っていたと思われる言葉から、「キマン（着物）」*quimám* 「アワビ」*auábe* 「ミソ」*missó* などがある。

<sup>7</sup> 日本では「マカオ料理」の名称で紹介されることが多いが、マカオ住民の9割を占める中国人の家庭料理ではないため、筆者は「マカエンセ料理」という名称を使用する。

<sup>8</sup> 実際にはポルトガル料理のメニューの一部として提供されている場合が多い。

トロノミー協会 (Confraria da Gastronomia Macaense) を中心に地道に継承活動が行われてきた結果、2012年に「マカエンセ料理」と「パトゥア語演劇」がマカオ無形文化財に認定された。さらに2017年11月、「東西の民族・文化が融合し、特別な食文化を持つ都市」として、マカオが中国で三都市目となるユネスコ食文化創造都市に登録された。「特別な食文化」の中にはもちろんマカエンセ料理も含まれており、彼らの継承運動が実を結んでいることが見て取れる。

### 3. 本科研期間以前の研究上の成果について

2014年、筆者はそれまでのマカエンセのエスニシティに関する研究と聞き取り調査の内容をまとめた書籍<sup>9</sup>を出版した。また同年から3年間にわたり、上智大学外国語学部ポルトガル語学科の3・4年生対象の選択科目「総合ポルトガル語」を担当し、マカエンセによってポルトガル語で書かれた20世紀文学作品を日本語に翻訳しながら背景となるマカオ社会を理解するという内容の授業を行った。マカエンセ文学は一般的に難解であると評されるポルトガル文学の流れを汲み、婉曲的な文章表現や一文が長い文章構成が多く、さらにブラジルのポルトガル語を中心に学習してきたポルトガル語学科の受講生にとって、欧州ポルトガル語の語彙や文法表現は目新しくかつ難解で、講読する以前に原文翻訳に時点で困難を感じる学生が多かった。そのため、事前に作品で使われている語彙や文章表現の詳細な解説や時代背景に関する受講生に配布してから講読を始めると、作品の内容理解が深まり、最後には「ポルトガル語という〈西洋〉の言葉を使用しながら、マカオという〈東洋〉の社会を描くマカエンセ独特の世界観に触れるのは楽しい経験だった」という肯定的な意見を得られた。

2016年、筆者は友人のマカエンセ料理研究家カルロス・カブラルが2013年にポルトガル語・パトゥア語・英語・広東語で執筆したマカエンセ料理レシピ・エッセイ集<sup>10</sup>の日本語版制作にあたり、ポルトガル語とパトゥア語の翻訳に携わった。パトゥア語の翻訳作業は困難を伴ったが、2001年にミゲル・デ・セナ・フェルナンデスが言語学者アラン・バクスターと共著で出版したパトゥア語とポルトガル語の語彙集<sup>11</sup>などを参考にして実現することができた。また、前述の上智大学での担当授業で作成した翻訳教材をもとに、2017年、アデー (ジョゼ・ドス・サントス・フェレイラ) がパトゥア語で執筆した詩作品数編の翻訳を含めた4名のマカエンセによる20世紀文学作品の翻訳集<sup>12</sup>を出版した。

### 4. 本科研期間中の研究上の成果について

2018年度 (2018年4月~2019年3月)、筆者はマカオに2回、ポルトガルに1回渡航した。1度目の渡澳は5月19、20日に行われたパトゥア語演劇公演の観劇を主目的とした短期間のフィールドワークであった。2度目は11月5日、マカオ大学ポルトガル・アジア研究センター (CIELA-Resarch Center for Luso-Asian Studies) の招聘を受けて同センターポルトガル語学科主催シンポジウム “Identities in Interaction: multidisciplinary perspectives” に参加し、「翻訳におけるマカエンセの言語、文化、アイデンティティの考察」の題目で発表を行った。発表では、それまでのマカエンセのエスニシティに関する研究内容と、上智大学外国語学部ポルトガル語学科の前述のマカエンセ文学の授業メソッドと学生の反応および成果について言及した。2019年3月には在マカオのマカオ国際研究所 (Instituto Internacional de Macau)

<sup>9</sup> 内藤理佳. 2014. 『ポルトガルがマカオに残した記憶と遺産—「マカエンセ」という人々』 上智大学出版。

<sup>10</sup> Cabral, Carlos A.A. 2016. *Comê Qui Cuza? What To Eat? 何を食べようか?*, Macao. (自費出版)

マカオ域内でのみ販売されている。2016年11月、著者の来日に合わせ、マカオ観光局とポルトガル大使館の協力を得てポルトガル大使公邸でマカエンセ料理の紹介を行い、参加者に無料で同書を配布した。

<sup>11</sup> Senna Fernandes, Miguel and Baxter, Alan N. 2001. “Maquista Chapado – vocabulário e expressões do crioulo português de Macau” Instituto Internacional de Macau.

<sup>12</sup> Fernandes, Henrique de Senna (et al.) 内藤理佳訳. 2017. 『マカエンセ文学への誘い—ポルトガル人子孫によるマカオ二十世紀文学』 上智大学出版。

の招聘を受け、ポルトガル・アヴェイロ大学で開催された孔子学院主催の国際学会に参加し、「マカエンセと言う人々アイデンティティ、文化、言語と文学の日本語への翻訳」と題する発表を行った。ポルトガルではマカオと異なり「マカエンセ」というエスニック・グループそのものの存在が知られていないため、マカエンセの定義、歴史、現状と彼らが抱えているエスニシティ消失の問題とパトゥア語演劇、伝統料理を通じた文化継承活動に重点を置いて発表した。

また、同年3月、マカエンセのエスニシティ研究以前から行ってきた大学・社会人講座における欧州ポルトガル語（ポルトガルで話されているポルトガル語）教育の集大成として、初級から中級レベルの欧州ポルトガル語独特の文法・会話表現を発音とともに解説した参考書を出版した<sup>13</sup>。

2019年度（2019年4月～2020年3月）には、6月に華南学会、6月に科研（基盤B）「フランス語圏におけるパトワ(patois)概念についての歴史・地理横断的研究」<sup>14</sup>研究会で発表をする機会を得た。中国華南地域を専門とする研究者が多く所属する華南学会では「澳門土生土語話劇團（マカオのポルトガル語系クレオール語劇団）定期公演のフィールドワークから」と題し、マカエンセのエスニシティとパトゥア語の歴史と現状、さらにパトゥア語を使った演劇活動について、中国語で制作された映像資料を交えて解説した。科研発表会では「パトワ」のフランス語圏外での使用について、マカオの事例についての専門的知識の提供という形で発表を行った。

中国返還後、マカエンセ・コミュニティの衰退と消滅の危機を迎えていると言っても過言ではない状況下、2001年以降、世界のマカエンセ・コミュニティの紐帯を強める目的のもと、3年に一度、マカオを会場としてマカエンセ世界大会が行われており、マカオ中国返還20周年直前の2019年11月23日から29日にかけて、返還後第7回目となるマカエンセ・コミュニティ世界大会が開催された。基本的にマカエンセとその関係者のみを対象とする大会であるが、筆者はマカエンセ研究者として前大会（2016年）に初めて参加を許可され、この年、常任理事会以外の大会プログラムに参加することができた。本大会の参加者は総計1,310人、うち海外からの参加者971人、マカオからの参加者339名であった。2017年にマカオがユネスコ食文化創造都市に登録されたことを受け、マカエンセの伝統家庭料理（マカエンセ料理）にフォーカスを置き、マカエンセ料理に関する講演会やマカエンセ・コミュニティ協会対抗の料理コンクールが開催された。また、2019年2月に中国が発表した、広東省・香港・マカオの3地域11都市を統合し世界のベイエリアとして発展させることを目標とした「グレーターベイエリア構想<sup>15</sup>」の中でマカオが担う重要な役割が大会全体を通じて強調された。

筆者は本大会にはあくまでオブザーバーという立場で参加しており、特に研究発表の予定はなかったが、マカエンセ研究者として唯一の日本からの参加ということで地元テレビ局（TDMポルトガル放送）から依頼され、急きょインタビュー番組に出演することになった<sup>16</sup>。思いがけない体験ではあったが、これまでの自分のマカオ地域研究や日本におけるポルトガル語教育の現状、今後の展望などを自分の言葉で話すことで、さらなる研究意欲をかきたてられた。

## 5. おわりに

コロナ禍に襲われた2020年度は予定していたマカオでのフィールドワークを実施できず、実質的な研究成果を残すことができなかった。しかし、これまでまったく日本で知られていなかったマカエンセ

<sup>13</sup> 内藤理佳.2019.『ポルトガルのポルトガル語』白水社.

<sup>14</sup> 研究代表者：佐野直子（名古屋市立大学）.

<sup>15</sup> 中国広東省（9都市）・香港・マカオをベイエリアの中核として位置づけ、面積約56,000km<sup>2</sup>（東京湾地域の約1.5倍）、人口約7,100万人、GDP規模約1.6兆米ドルの地域（数字は2018年末）を国際金融・輸送・貿易の三大センターとし、2022年までに世界的ベイエリアとしての基礎を形成し、2035年までに完成してGDP規模で東京・ニューヨークを追い越そうとするものである。<https://www.bayarea.gov.hk/>（2021年3月17日確認）

<sup>16</sup> 2019年11月27日TDMマカオポルトガル語放送ニュース。

の存在が、少しずつメディアに取り上げられ、「マカエンセ」という名称を使って紹介されるようになって<sup>17</sup>ことを受け、マカオで限定販売されているパトゥア語演劇公演のDVDや、YOUTUBEにアップされたマカエンセのエスニシティに関する映像資料の日本語字幕の作成に取り組んでおり、最終的に大学・社会人教育の教材として役立てたいと考えている。また、今後もマカオ在住のマカエンセのみならず、ディアスポラのマカエンセたちとのコンタクトを維持し、実際に各地を訪問しフィールドワークを行なうという長期的目標を掲げ、2022年の世界大会にも継続して参加することで、引き続きコミュニティの動向を追いながら、引き続きマカエンセのエスニシティ研究を継続していきたいと考えている。

## 参考文献

- Amaro, Ana Maria (1988). *Filhos da Terra. Review of Culture* No.20 (2nd series) July/September 1994, English Edition, Instituto Cultural de Macau, pp.13-67.
- Cabral, João de Pina and N. Lourenço (1993). *Em Terra de Tufões – Dinâmicas da Etnicidade Macaense*, Instituto Cultural de Macau.
- Costa, Francisco Lima da (2005). *Fronteiras da Identidade: Macaenses em Portugal e em Macau*, Fim de Século-Edições, Sociedade Unipessoal, Lda.
- 内藤理佳. 2009. 「中国返還後のマカエンセ (Macaenses) のアイデンティティの変容 – マカオ在住のマカエンセ 16名の聞き取り調査から –」 放送大学大学院修士論文.
- 内藤理佳. 2014. 『ポルトガルがマカオに残した記憶と遺産 – 「マカエンセ」という人々』 上智大学出版.
- Cabral, Carlos A.A. (2016). *Comé Qui Cuza? What To Eat? 何を食べようか?*, Macao. (自費出版)
- Senna Fernandes, Miguel and Baxter, Alan N.(2001). *Maquista Chapado – vocabulário e expressões do crioulo português de Macau*, Instituto Internacional de Macau.
- Fernandes, Henrique de Senna (et al.) 内藤理佳訳. 2017. 『マカエンセ文学への誘い – ポルトガル人子孫によるマカオ二十世紀文学』 上智大学出版.

執筆者連絡先 : linda@muj.biglobe.ne.jp, r-naito@sophia.ac.jp

本稿は科学研究費助成事業基盤研究 (B) 「アジア諸語の言語類型と社会・文化的多様性を考慮した CEFR 能力記述方法の開発研究」 (2018 年度-2020 年度、研究代表者富盛伸夫、研究課題/領域番号 18H00686) の研究成果のひとつとして公開するものである。

---

<sup>17</sup> NHK-BS 「おはよう日本」 ワールドレポート 「マカオ大航海時代の文化を守れ」 2018 年 12 月 15 日放映。マカエンセに関する取材は内藤が協力した。